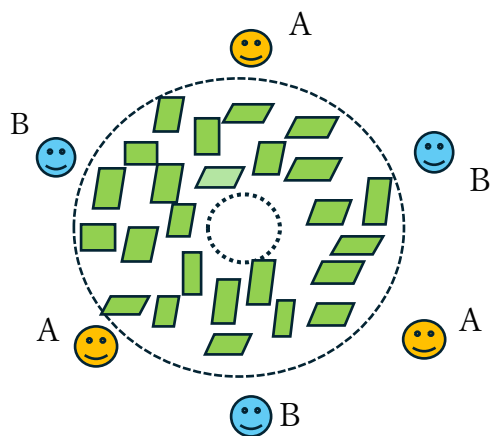


【競技の進め方】（ルール）

1. 競技は2チームが同一の札を取り合う「チラシ戦」とします。
2. 1チームの選手数は3名（登録選手3名以上5名以内）とします。
3. 試合途中での選手の変更は可能です。そのタイミングは10枚読んで、時計回りに移動する際とします。その他の交代は特別な場合を除き認められません。
4. 試合は2試合行い各パートの優勝チームを表彰します。但し全体の参加チーム数が奇数の場合3試合行いますが、1試合はお休みになります。
5. パートは参加チーム数により4チームのパートと、3チームのパートになる場合があります。
6. 各パートの優勝チームは次の通りの方法で決めます。
 - ① 勝ち数の多いチーム
 - ② 取った札の総枚数が多いチーム
 - ③ 同数の場合は、チームメンバー3名が1名ずつ相手チームのメンバーと対戦しその勝敗数で決めます。（6枚の内5枚読みます）
7. 試合の組み合わせは実行委員会で決めます。
8. 札は五色百人一首60枚（各色12枚ずつ）使用し、ドーナツ状に並べ取り合い、その枚数を競います。
9. 6名で自分チーム、相手チーム、自分チームと交互に並び札を囲みます。
10. 10枚読むたびに時計回りに一つ移動します。
11. 空札はありません。全部で55枚読みます。
12. 読み方は上の句1回下の句2回読み、更に〇色札と言います
下の句の一回目は旧仮名づかいで読み、二回目は今の読み方で読みます。
 - 読み方例
 - いにしへの ならのみやこの やえざくら （上の句）
 - けふここのへに にほいぬるかな （下の句）
 - きょうここのへに においぬるかな （下の句）
 - 青札です。 （札の色）
13. 取った札が正しいか審判が確認します。
14. 次の札を読む前に「続けます」と言って上の句から読みます。
15. 暗記時間は5分間とします。
16. 次の読みが始まってからは、前に読まれた札は取れません。
17. 札の移動はできません。
18. 札には一度しか触れません。間違っただ後正しい札を見つけても取れません。二度触れてしまった場合はお手付きとし、場に札を1枚出します。
19. 札は押さえて取ります。払い手は禁じます。
20. 同時に札を抑えた際は、じゃんけんで決めます。手が重なった際は下になった方の取りとします。
21. 札はどちらの手で取っても構いません。

22. 読まれた札と違う札を触った場合、お手付きとします。お手付きをした場合、チームで取った札を1枚中央に出します。その札は、次に読まれた札を取った方がもらう事ができます。
- 更に、お手付きをした人は1回休みとします。
23. 一回休みになった人は、両手を頭に置きます。
24. 休みの選手が読まれた札を取った場合は、その札は相手の札になります。
25. この要綱に定めのない場合は、競技役員の協議により決定します。

【対戦イメージ】



(百人一首一覽)

歌番	上の句	下の句	意味・訳
1番	アキ ^タ 秋の田の かりほの庵 ^{イオ トマ} の 苫をあらみ	わが衣手 ^{コロモデ} は 露 ^{ツユ} にぬれつつ	秋の田の側につくった仮小屋に泊まってみると、屋根をふいた苫の目があらいで、その隙間から忍びこむ冷たい夜露が、私の着物の袖をすっかりと濡らしてしまっているなあ。
2番	ハルスギ ^{ナツキ} 春過ぎて 夏来にけらし シロタエ ^{シロタエ} 白妙の	ヨロモキ ^{チョウ} 衣干すてふ アマ ^{カグヤマ} 天の香具山	もう春は過ぎ去り、いつのまにか夏が来てしまったようですね。香具山には、あんなにたくさんのまっ白な着物が干されているのですから。
3番	あしびきの ヤマドリ ^オ 山鳥の尾の しだり尾 ^オ の	ながながし夜 ^ヨ を ひとりか ^{ネン} も寝む	夜になると、雄と雌が離れて寝するという山鳥だが、その山鳥の長く垂れ下がった尾のように、こんなにも長い長い夜を、私もまた、(あなたと離れて)ひとり寂しく寝るのだろうか。
4番	タ ^ゴ 田子の浦に ウツ ^イ うち出でて見れば シロタエ ^{シロタエ} 白妙の	フジ ^{タカネ} 富士の高嶺に ユキ ^フ 雪は降りつつ	田子の浦の海岸に出てみると、雪をかぶったまっ白な富士の山が見事に見えるが、その高い峰には、今もしきりに雪がふり続けている。(ああ、なんと素晴らしい景色なのだろう)
5番	オクヤマ ^{モミジ} 奥山に 紅葉踏み分け ナ ^{シカ} 鹿の	コエキ ^{トキ} 声聞く時ぞ アキ ^{カナ} 秋は悲しき	奥深い山の中で、(一面に散りしいた)紅葉をふみわけて鳴いている鹿の声を聞くときは、この秋の寂しさが、いっそう悲しく感じられることだ。
6番	カササギ ^{フタ} 鵜の 渡せる橋に 置く霜 ^{シモ} の	シロ ^ミ 白きを見れば ヨ ^フ 夜ぞ更けにける	かささが渡したという天上の橋のように見える宮中の階段であるが、その上に降りた真っ白い霜を見ると、夜も随分と更けたのだなあ。
7番	アマ ^{ハラ} 天の原 ふりさけ見れば カサガ ^{カサガ} 春日なる	ミカサ ^{ヤマ} 三笠の山に イ ^{ツキ} 出でし月かも	大空を振り仰いで眺めると、美しい月が出ているが、あの月はきっと故郷である春日の三笠の山に出た月と同じ月だろう。(ああ、本当に恋しいことだなあ)
8番	わが庵 ^{イオ} は 都 ^{ミヤコ} の辰巳 ^{タツミ} しかぞ住む	世 ^ヨ をうち山 ^{ヤマ} と 人 ^{ヒト} はいふなり	私の草庵は都の東南にあって、そこで静かにくらししている。しかし世間の人たちは(私が世の中から隠れ)この宇治の山に住んでいるのだと噂しているようだ。
9番	ハナ ^{イロ} 花の色は ウツ ^ツ 移りにけりな いたづらに	わが身世 ^{ミヨ} にふる ながめせしみに	花の色もすっかり色あせてしまいました。降る長雨をぼんやりと眺めているうちに。
10番	これやこの ユ ^{カエ} 行くも帰るも別れては ワカ ^{ワカ}	シ ^シ 知るも知らぬも オウサカ ^{セキ} 逢坂の関	これがあの有名な、(東国へ)下って行く人も都へ帰る人も、ここで別れてはまたここで会い、知っている人も知らない人も、またここで出会うという逢坂の関なのだなあ。
11番	わた ^{ハラ} の原 八十島 ^{ヤソシマ} かけて コ ^イ 漕ぎ出でぬと	ヒト ^ツ 人には告げよ アマ ^{ツリブネ} 海人の釣船	(篁は)はるか大海原を多くの島々目指して漕ぎ出して行ったと、都にいる親しい人に告げてくれないか、そこの釣舟の漁夫よ。
12番	アマ ^{カゼ} 天つ風 クモ ^{カヨイジ} 雲の通ひ路 フ ^ト 吹き閉ぢよ	オトメ ^{スガタ} 乙女の姿 しばしとどめむ ^シ	空吹く風よ、雲の中にあるという(天に通じる)道を吹いて閉じてくれないか。(天に帰っていく)乙女たちの姿を、しばらくここに引き留めておきたいから。
13番	ツクバネ ^{ミネ} 筑波嶺の 峰より落つる ミナノガワ ^{ミナノガワ} 男女川	コイ ^ツ 恋ぞ積もりて フチ ^{フチ} 淵となりぬる	筑波山の峯から流れてくるみなのかみも、(最初は小さなせせらぎほどだが)やがては深い淵をつくるように、私の恋もしだいに積もり、今では淵のように深いものとなってしまった。
14番	ミチノク ^{タレ} 陸奥の しのぶもぢずり 誰ゆゑ ^エ に	ミダ ^{ミダ} 乱れぞめにし われならなくに	奥州のしのぶもぢずりの乱れ模様のように、私の心も(恋のために)乱れていますが、いったい誰のためにこのように思い乱れているのでしょうか。(きっとあなたの所為に違いありません)
15番	キミ ^{ハル} 君がため 春の野に出でて ワカ ^ツ 若菜摘む	わが衣手 ^{コロモデ} に ユキ ^フ 雪は降りつつ	あなたのために春の野に出て若菜を摘んでいましたが、春だというのにちらちらと雪が降ってきて、私の着物の袖にも雪が降りかかっています。(それでも、あなたのことを思いながら、こうして若菜を摘んでいるのです)
16番	タ ^{ワカ} 立ち別れ いなばの山 ^{ヤマ} の 峰 ^{ミネ} に生ふる	まつとし聞かば ^キ 今 ^{イマ} 帰 ^{カエ} り来む ^{コン}	あなたと別れて(因幡の国へ)行くけれども、稲葉の山の峰に生えている松のように、あなたが待っていると聞いたなら、すぐにも都に帰ってまいりましょう。
17番	ちはやぶる カミヨ ^キ 神代も聞かず タツタガワ ^{タツタガワ} 竜田川	からくれなゐに ^イ 水 ^{ミズ} くくるとは	(川面に紅葉が流れていますが)神代の時代にさえこんなことは聞いたことがありません。竜田川一面に紅葉が散りしいて、流れる水を鮮やかな紅の色に染めあげるなどということは。
18番	スミ ^エ 住の江の 岸 ^{キシ} に寄る波 ^ヨ よるさ ^{ナミ} へや	ユメ ^{カヨイジ} 夢の通ひ路 ヒトメ ^シ 人目よくらむ	住の江の岸に打ち寄せる波のように (いつもあなたに会いたいのだが)、どうして夜の夢の中でさえ、あなたは人目をばばかり会ってはくれないのだろう。
19番	ナニワガタ ^{ミジカギン} 難波潟 短き蘆 ^ア の ふしの間も	ア ^フ 逢はでこの世 ^ヨ を 過 ^ス ぐしてよとや	難波潟の入り江に茂っている芦の、短い節と節の間のような短い時間でさえお会いしたいのに、それも叶わず、この世を過ごしていけとおっしゃるのでしうか。

歌番	上の句	下の句	意味・訳
20番	わびぬれば イマ 今はおなじ ナニワ 難波なる	みをつくしても ア、ワ、ン 逢はむとぞ思ふ	(あなたにお逢いできなくて) このように思いわびて暮らしていると、今はもう身を捨てたのと同じことです。いっそのこと、あの難波にある航行の目印、みおつくしのように、この身を捨ててもお会いしたいと思っています。
21番	今来むと イマヨシ 言ひしばかりに ナガツキ 長月の	アリアケ 有明の月を マ 待ち出でつかな	「今すぐに行きましょう」とあなたがおっしゃったので、(その言葉を信じて) 九月の長い夜を待っていましたが、とうとう有明の月が出る頃を迎えてしまいました。
22番	吹くからに アキ 秋の草木の オ しをるれば	ヤマカゼ むべ山風を アラシ 嵐といふらむ	山風が吹きおろしてくると、たちまち秋の草や木が萎れてしまうので、きっと山風のことを「嵐(荒らし)」というのだろう。
23番	月見れば ツキミ ちぢにもこそ カナ 悲しけれ	わが身一つ ミ の アキ 秋にはあらねど	秋の月を眺めていると、様々と思い起こされ物悲しいことです。秋はわたしひとりだけにやって来たのではないのですが。
24番	このたびは ト ぬさも取りあはず エ 手向山	モミジ 紅葉の錦 ニシキカミ 神のまにまに	今度の旅は急いで発ちましたので、捧げるぬさを用意することも出来ませんでした。しかし、この手向山の美しい紅葉をぬさとして捧げますので、どうかお心のままにお受け取りください。
25番	名にし負はば オウサカヤマ 逢坂山の サ ねかつら	ヒト 人に知られで ク 来るよしもがな	「逢う」という名の逢坂山、「さ寝」という名のさねかずらが、その名に違わぬのであれば、逢坂山のさねかずらを手繰り寄せるように、あなたのもとにいく方法を知りたいものです。
26番	オグラヤマ 小倉山 ミナ 峰のもみち葉 ハ 心あらば	イマ 今ひとたびの ミ みゆき待たなむ	小倉山の峰の美しい紅葉の葉よ、もしお前に哀れむ心があるならば、散るのを急がず、もう一度の行幸を待っていてくれないか。
27番	みかの原 ハラ わきて流る ナガ 泉川	いつ見きとてか コイ 恋しかるらむ	みかの原を湧き出て流れる泉川よ、(その「いつ」という言葉ではないが) その人をいつ見たといつては、恋しく思ってしまう。本当は一度たりとも見たこともないのに。
28番	ヤマザト 山里は フユ 冬ぞ寂しさ サビ まさりける	ヒトメ 人目も草も クサ かれぬと思へば	山里はいつの季節でも寂しいが、冬はとりわけ寂しく感じられる。尋ねてくれる人も途絶え、慰めの草も枯れてしまうのだと思うと。
29番	心あてに オ 折らばや折らむ ハツシモ 初霜の	オ 置きまどはせる シラユク 白菊の花	無造作に折ろうとすれば、果たして折れるだろうか。一面に降りた初霜の白さに、いずれが霜が白菊の花か見分けもつかないほどなのに。
30番	有明の アリアケ つれなく見えし ミ 別れより	アカツキ 暁ばかり ウ 憂きものはなし	あなたと別れたあの時も、有明の月が残っていましたが、(別れの時のあなたは有明の月のようにつれないものでしたが) あなたと別れてからというもの、今でも有明の月がかかる夜明けほどつらいものはありません。
31番	朝ぼらけ アサ 有明の月と アリアケ 見るまでに	ヨシノ 吉野の里に フ 降れる白雪	夜が明ける頃あたりを見てみると、まるで有明の月が照らしているのかと思うほどに、吉野の里には白雪が降り積もっているではないか。
32番	ヤマガハ 山川に カゼ 風のかけたる シ しがらみは	ナガ 流れもあへぬ エ 紅葉なりけり	山あいの谷川に、風が架け渡したなんとも美しい柵があったのだが、それは(吹き散らされたままに)流れきれずにいる紅葉だったのだなあ。
33番	ひさかたの ヒカリ 光のどけき ハル 春の日に	シヅゴコロ 静心なく ハナ 花の散るらむ	こんなにも日の光が降りそそいでいるのどかな春の日であるのに、どうして落着いた心もなく、花は散っていくのだろうか。
34番	誰をか タレ も シ 知る人 ヒト にせむ ン 高砂の	マン 松も昔の ムカシ 友 トモ ならなくに	(友達は次々と亡くなってしまったが) これから誰を友とすればいいのだろう。馴染みあるこの高砂の松が長寿だからといっても、昔からの友ではないのだから。
35番	人はいさ ユコロ 心も知らず シ ふるさとは	ハナ 花ぞ昔の ムカシ 香 カ に匂ひける	さて、あなたの心は昔のままであるかどうか分かりません。しかし馴染み深いこの里では、花は昔のままの香りで美しく咲きにおっているではありませんか。(あなたの心も昔のままですよ)
36番	夏の夜は ナツ まだ宵ながら ヨ 明けぬるを	クモ 雲のいづこに ツキヤド 月宿らむ	夏の夜は、まだ宵のうちだと思っているのに明けてしまったが、(こんなにも早く夜明けが来れば、月はまだ空に残っているだろうが) いったい月は雲のどの辺りに宿をとっているのだろうか。
37番	白露に シラツユ 風の吹きしく カゼ 秋の野は	つらぬきとめぬ タマ 玉ぞ散りける	(草葉の上に落ちた) 白露に風がしきりに吹きつけている秋の野のさまは、まるで糸に通してとめていない玉が、美しく散り乱れているようではないか。
38番	忘らる ワス る ミ 身をば思はず オモワ 誓ひてし	ヒト 人の命の イノチ 惜しくもあるかな	あなたに忘れられる我が身のことは何ほどのことでもありませんが、ただ神にかけて(わたしをいつまでも愛してくださると) 誓ったあなたの命が、はたして神罰を受けはしないかと、惜しく思われてなりません。
39番	浅茅生の アサチウ 小野の篠原 オノ しのぶれど	あまりてなどか ヒト 人の恋しき	浅茅の生えた寂しく忍ぶ小野の篠原ではありませんが、あなたへの思いを忍んではいますが、もう忍びきることは出来ません。どうしてこのようにあなたが恋しいのでしょうか。
40番	しのぶれど イロ 色に出でにけり イ わが恋は	ものや思ふと オモフ 人の問ふまで	人に知られまいと恋しい思いを隠していたけれど、とうとう隠し切れずに顔色に出てしまったことだ。何か物思いをしているのではと、人が尋ねるほどまでに。

歌番	上の句	下の句	意味・訳
41番	恋 ^{コイ} すて ^{チョウ} ふ わが ^ナ 名は ^タ まだき 立ち ^タ にけり	人 ^{ヒト} 知れ ^シ ずこそ 思 ^{オモイ} ひそめしか	わたしが恋をしているという噂が、もう世間の人たちの間には広まってしまったようだ。人には知られないよう、密かに思いはじめたばかりなのに。
42番	契 ^{チギ} りきな かた ^{ソデ} みに袖を しぼり ^{ソデ} つつ	末 ^{スエ} の松山 ^{マツヤマ} 波 ^{ナミ} 越 ^コ さじとは	かたく約束を交わしましたね。互いに涙で濡れた袖をしぼりながら、波があの末の松山を決して越すことがないように、二人の仲も決して変わることはありませんまいと。
43番	逢 ^{アイ} ひ ^ミ 見ての のち ^{コノチ} の心 ^{ココロ} に くら ^ク ぶれば	昔 ^{ムカシ} は ^シ ものを 思 ^{オモフ} はざりけり	このようにあなたに逢ってから今の苦しい恋心にくらべると、会いたと思っていた昔の恋心の苦しみなどは、何も物思いなどしなかったのと同じようなものです。
44番	逢 ^{オウ} ふことの 絶 ^タ えて ^テ しなくは な ^ナ かなかに	人 ^{ヒト} をも身 ^ミ をも 恨 ^{ウラ} みざらまし	あなたと会うことが一度もなかったのなら、むしろあなたのつれなさも、わたしの身の不幸も、こんなに恨むことはなかったでしょうに。(あなたに会ってしまったばかりに、この苦しみは深まるばかりです)
45番	あは ^ア れとも い ^イ ふべき人 ^{ヒト} は 思 ^{オモ} ほえで	身 ^ミ のいたづらに な ^ナ りぬべきかな	(あなたに見捨てられた) わたしを哀れだと同情を向けてくれそうな人も、今はいるように思えません。(このままあなたを恋しながら) 自分の身がむなしく消えていく日を、どうすることもできず、ただ待っているわたしなのです。
46番	由良 ^{ユラ} の門 ^{カド} を 渡 ^{ワタ} る舟人 ^{フナヒト} かち ^タ を絶 ^タ え	ゆく ^{ユク} へも知らぬ 恋 ^{コイ} のみちかな	由良の海峡を渡る船人が、かいをなくして、行く先も決まらぬままに波間に漂っているように、わたしたちの恋の行方も、どこへ漂っていくのか思い迷っているものだ。
47番	八重 ^{ヤエ} むぐら しげ ^{ヤド} れる宿 ^{ヤド} の さび ^{サビ} しきに	人 ^{ヒト} こそ見 ^ミ えね 秋 ^{アキ} は来 ^キ にけり	このような、幾重にも雑草の生い茂った宿は荒れて寂しく、人は誰も訪ねてはこないが、ここにも秋だけは訪れるようだ。
48番	風 ^{カゼ} をいた ^イ み 岩 ^{イワ} うつ波 ^{ナミ} の おの ^{オノ} れのみ	く ^ク だけてものを 思 ^{オモウ} ふころかな	風がとても強いので、岩に打ちつける波が、自分ばかりが砕け散ってしまうように、(あなたがとてもつれないので) わたしの心は(恋に悩み) 砕け散るばかりのこの頃です。
49番	御垣 ^{ミカキモリ} 守 ^{モリ} 衛士 ^{エジ} のたく火 ^ヒ の 夜 ^{ヨル} は燃 ^モ え	昼 ^{ヒル} は消 ^キ えつつ ものをこそ思 ^{オモ} へ	禁中の御垣を守る衛士のかがり火は、夜は赤々と燃えているが、昼間は消えるようになって、まるで、(夜は情熱に燃え、昼間は思い悩んでいる) わたしの恋の苦しみではないか。
50番	君 ^{キミ} がため 惜 ^オ しからざりし 命 ^エ さへ	長 ^{ナガ} くもがなと 思 ^{オモイ} ひけるかな	あなたに会うためなら惜しいとは思わなかった私の命ですが、こうしてあなたと会うことができた今は、いつまでも生きていたいと思っています。
51番	かくとだに え ^エ やは伊吹 ^{イフキ} の さしも ^{サシモ} 草 ^{クサ}	さしも ^{サシモ} 知らじな 燃 ^モ ゆる思 ^{オモイ} ひを	これほどまで、あなたを思っているということさえ打ち明けることができずにいるのですから、ましてや伊吹山のさしも草が燃えるように、私の思いもこんなに激しく燃えているとは、あなたは知らないことでしょう。
52番	明 ^ア けぬれば 暮 ^ク るものとは 知 ^シ りながら	なほう ^{ナホウ} らめしき 朝 ^{アサ} ぼらけかな	夜が明ければ、やがてはまた日が暮れてあなたに会えるのだと分かってはいても、やはりあなたと別れる夜明けは、恨めしく思われるものです。
53番	嘆 ^{ナゲ} きつつ ひとり寝 ^ス る夜 ^ヨ の 明 ^ア くる間 ^マ は	いかに ^{ヒサ} 久しき ものとかは知 ^チ る	(あなたが来てくだらないことを) 嘆き哀しみながらひとりで夜をすごす私にとって、夜が明けるのがどれほど長く感じられるものか、あなたはいったいご存じなのでしょうか。
54番	忘れ ^{ワス} じの ゆく未 ^{スエ} までは かた ^カ ければ	今日 ^{キョウ} を限 ^{カギ} りの 命 ^{イノチ} ともがな	いつまでも忘れまいとすることは、遠い将来までとはとても難しいものですから、(あなたの心変わりを見るよりも早く) いっそのこと、今日を最後に私の命が終わって欲しいものです。
55番	滝 ^{タキ} の昔 ^{オト} は 絶 ^タ えて久 ^{キウ} しく な ^ナ りぬれど	名 ^ナ こそ流 ^{ナガ} れて なほ ^{ナホ} 聞 ^キ こえけれ	水の流れが絶えて滝音が聞こえなくなってから、もう長い月日が過ぎてしまったが、(見事な滝であった) その名は今も伝えられ、よく世間にも知れ渡っていることだ。
56番	あら ^ア ざらむ この世 ^ヨ のほか ^{ホカ} の 思 ^{オモイ} ひ出 ^デ に	いま ^{イマ} ひとたびの 逢 ^{オウ} ふこともがな	私はもうすぐ死んでしまうことなのでしょうが、私のあの世への思い出になるように、せめてもう一度なりともあなたにお会いしたいのです。
57番	めぐり逢 ^ア ひて 見 ^ミ しやそれとも わかぬ ^マ 間に	雲 ^{クモ} がくれに ^シ 夜半 ^ヨ の月 ^{ツキ} かな	久しぶりにめぐり会ったのに、それがあなたかどうか分からない間に帰ってしまうなど、まるで(早くも) 雲に 隠れてしまった夜中の月のようではありませんか。
58番	有馬 ^{アリヤマ} 山 ^{ヤマ} 猪名 ^{イノナ} の笹原 ^{ササハラ} 風 ^{カゼ} 吹 ^フ けば	い ^イ でそよ人 ^{ヒト} を 忘れ ^{ワス} や ^フ はする	有馬山のふもとにある猪名の笹原に風が吹くと、笹の葉がそよそよと鳴りますが、そうです、その音のように、どうしてあなたを忘れたりするものでしょうか。
59番	やす ^{ヤス} らはで 寝 ^ネ なましものを さ夜 ^ヨ 更 ^フ けて	傾 ^{カタク} くまでの 月 ^{ツキ} を見 ^ミ しかな	(あなたが来ないと知っていたら) さっさと寝てしまえばよかったものを、(あなたの約束を信じて待っていたら) とうとう明け方の月が西に傾くまで眺めてしまいました。
60番	大江 ^{オオエヤマ} 山 ^{ヤマ} いく野 ^ノ の道 ^{ミチ} の 遠 ^{トオ} ければ	まだふみも見 ^ミ ず 天 ^{アマ} の橋 ^{ハシ} 立 ^{ダテ}	(母のいる丹後の国へは) 大江山を越え、生野を通って行かなければならない遠い道なので、まだ天橋立へは行ったことがありません。(ですから、そこに住む母からの手紙など、まだ見ようはずありません)

歌番	上の句	下の句	意味・訳
61番	いにしへの ^エ 奈良の都の ^{ナ ラ ミヤコ} 八重桜 ^{ヤエザクラ}	けふ ^{キョウ} 九重に ^{コノノエ} にほひめるかな ^{オノイ}	昔、奈良の都で咲き誇っていた八重桜が、今日はこの宮中で、いっそう美しく咲き誇っているではありませんか。
62番	夜をこめて ^ヨ 鳥の空音は ^{トリ ソラネ} 謀るとも ^{ハカ}	よに逢坂の ^{オウサカ} 関はゆるさじ ^{セキ}	夜の明けないうちに、鶏の鳴き声を真似て夜明けたとだまそうとしても、(あの中国の函谷関ならいざ知らず、あなたとわたしの間にある)この逢坂(おおさか)の関は、決して開くことはありません。
63番	今はただ ^{イマ} 思ひ絶えなむ ^{オモイ タ} とばかりを ^ン	人づてならで ^{ヒト} いふよしもがな ^ウ	今はもう、あなたのことはきっぱりと思い切ってしまうと決めましたが、そのことだけを人づてでなく、直接 あなたに伝える方法があればいいのですが。
64番	朝ぼらけ ^{アサ} 宇治の川霧 ^{ウ ジ カワギリ} たえだえに	あらはれわたる ^ワ 瀬々の網代木 ^{セ ゼ アジロギ}	ほのぼのと夜が明けるころ、宇治川に立ちこめた川霧が切れ切れに晴れてきて、瀬ごとに立っている網代木が次第にあらわれてくる景色は、何ともおもしろいものではないか。
65番	恨みわび ^{ウラ} ほさぬ袖だに ^{ソデ} あるものを	恋に朽ちなむ ^{コイ ク} 名こそ惜しけれ ^{ナ コソ オ}	あなたの冷たさを恨み、流す涙でかわくひまさえない袖でさえ口惜いの、この恋のために、(つまりぬ噂で) わたしの名が落ちてしまうのは、なんとも口惜しいことです。
66番	もろともに ^フ あはれと思へ ^エ 山桜 ^{ヤマザクラ}	花よりほかに ^{ハナ} 知る人もなし ^{シ 人 ヒト}	私がおまえを愛しむように、おまえも私を愛しいと思ってくれよ、山桜。(こんな山奥では)おまえの他には私を知る人は誰もいないのだから。
67番	春の夜の ^{ハル ヨ} 夢ばかりなる ^{ユメ} 手枕に ^{タマクラ}	かひなく立たむ ^{カヒ ナク} 名こそをしけれ ^{ナ コソ オ}	春の夜のはかない夢のように、(僅かばかりの時間でも) あなたの腕を枕にしたりして、それでつまらない噂が立つことにでもなれば、それがまことに残念なのです。
68番	心にも ^{ココロ} あらで憂き夜に ^{ウ ヨ} 長らへば ^{ナガ エ}	恋しかるべき ^{コイ} 夜半の月かな ^{ヨ フ ツキ}	(もはやこの世に望みもないが)心にもなく、このつらい浮世を生きながらえたなら、さぞかしこの宮中で見た夜の月が恋しく思い出されることであろうなあ。
69番	嵐吹く ^{アラシフ} 三室の山の ^{ミムロ ヤマ} もみぢ葉は ^バ	竜田の川の ^{タツタ カワ} 錦なりけり ^{ニシキ}	嵐が吹き散らした三室の山の紅葉の葉が、龍田川に一面に散っているが、まるで錦の織物のように美しいではないか。
70番	寂しさに ^{サビ} 宿を立ち出でて ^{ヤド タ} ながむれば ^イ	いづこも同じ ^{オナ} 秋の夕暮れ ^{アキ ユウグ}	寂しくて家を出てあたりを眺めてはみたが、この秋の夕暮れの寂しさはどこも同じであるものだ。
71番	夕されば ^{ユフ} 門田の稲葉 ^{カドタ イナバ} 訪れて ^{オトズ}	蘆のまろ屋に ^{アシ} 秋風ぞ吹く ^{ザ アキカゼ フ}	夕方になると、家の前にある田の稲葉を音をたてて、葦葦きのそまつな小屋に秋風が吹き訪れることよ。
72番	音に聞く ^{オト キ} 高師の浜の ^{タカシ ハマ} あだ波は ^{ナミ}	かけじや袖の ^{ソデ} ぬれもこそすれ	評判の高い高師の浜の寄せてはかえす波で、袖を濡らさないようにしましょう。
73番	高砂の ^{タカサゴ} 尾の上の桜 ^{オ エ サクラ} 咲きにけり	外山の霞 ^{トヤマ カスミ} 立たずもあらなむ ^ン	高砂の峰にも桜の花が咲いたようだから、(その桜を見たいので)手前の山の霞よ、どうか立たないようにしてくれないか。
74番	憂かりける ^ウ 人を初瀬の ^{ヒト ハツセ} 山おろしよ ^{ヤマ}	激しかれとは ^{ハゲ} 祈らぬものを ^{イノ}	私に冷たかった人の心が変わるようにと、初瀬の観音さまにお祈りしたのだが、初瀬の山おろしよ、そのようにあの人の冷たさがいっそう激しくなれとは祈らなかったではないか…
75番	契りおきし ^{チギ} させもが露を ^{ツユ} 命にて ^{イノチ}	あはれ今年の ^{ワ コトシ} 秋もいぬめり ^{アキ}	あなたが約束してくださった、させも草についた恵みの露のような言葉を、命のように恃んでおりましたが、それもむなく、今年の秋もすぎしてしまうようです。
76番	わたの原 ^{ハラ} 漕ぎ出でて見れば ^ユ ひさかたの	雲居にまがふ ^{クモイ} 沖つ白波 ^{ゴ フ オキ シラナミ}	大海原に船を漕ぎ出してみると、遠くの方では、雲と見わけがつかないような白波が立っているのが見える。(まことにおもしろい眺めではないか)
77番	瀬をはやみ ^セ 岩にせかる ^{イワ} 滝川の ^{タキガワ}	われても末に ^{スエ} 逢はむとぞ思ふ ^{アウ ヲン オモフ}	川の流れが早いので、岩にせき止められた急流が時にはふたつに分かれても、またひとつになるように、わたし達の間も、(今はたとえ人にせき止められていようと)後にはきつと結ばれるものと思っています。
78番	淡路島 ^{アワジシマ} 通ふ千鳥の ^{カヨウ チドリ} 鳴く声に ^{ナ コエ}	幾夜寝覚めぬ ^{イクヨ ネ ザ} 須磨の関守 ^{ス マ セキモリ}	淡路島から通ってくる千鳥の鳴き声に、幾晩目を覚ましたことであろうか、この須磨の関の関守は…。
79番	秋風に ^{アキカゼ} たなびく雲の ^{クモ} 絶え間より	漏れ出づる月の ^{ツキ} 影のさやけさ ^{カゲ}	秋風に吹かれてたなびいている雲の切れ間から、もれでてくる月の光は、なんと清らかで澄みきっていることであろう。
80番	長からむ ^{ナガ} 心も知らず ^ン 黒髪の ^{コクロシ}	乱れて今朝は ^{ミダ ケ サ} 物をこそ思へ ^{モノ オモエ}	あなたの心は未永くまで決して変わらないかどうか、わたしの黒髪が乱れているように、わたしの心も乱れて、今朝は物思いに沈んでおります。
81番	ほととぎす ^ナ 鳴きつる方を ^{カタ} ながむれば	ただ有明の ^{アリアカ} 月ぞ残れる ^{ツキ ヲノコ}	ほととぎすの鳴き声が聞こえたので、その方に目をやってみたが、(その姿はもう見えず)空には有明の月が残っているばかりであった。
82番	思ひわび ^{オモイ} さても命は ^{イノチ} あるものを	憂きに堪へぬは ^{ウ タ} 涙なりけり ^{ナミダ}	つれない人のことを思い、これほど悩み苦しんでいても、命だけはどうにかあるものの、この辛さに耐えかねるのは(次から次へと流れる)涙であることだ。
83番	世の中よ ^ヨ 道こそなけれ ^{ナカ} 思ひ入る ^{ミチ}	山の奥にも ^{ヤマ オク} 鹿ぞ鳴くなる ^{シカウ ナ}	世の中というものは逃れる道がないものだ。(この山奥に逃れてきたものの)この山奥でも、(辛いことがあったのか)鹿が鳴いているではないか。

歌番	上の句	下の句	意味・訳
84番	ナガ エ 長らへば またこのごろや しのばれむ	ウ 憂しと見し世ぞ 今は恋しき	この先生きながらえるならば、今のつらいことなども懐かしく思い出されるのだろうか。昔は辛いと思っていたことが、今では懐かしく思い出されるのだから。
85番	ヨ 夜もすがら 物思ふころは 明けやらで	ミヤ 閨のひまさへ つれなかりけり	一晩中恋しい人を思って悩んでいるので、早く夜が明けたらよいと思っているのですが、なかなか夜は明けず、寝室の隙間さえもわたしにつれなく感じられます。
86番	ナゲ ツキ ワ モノ オモフ 嘆けとて 月やは物を 思はする	カコチ 顔なる わが涙かな	嘆き悲しめと月はわたしに物思いをさせるのだろうか。いや、そうではあるまい。本当は恋の悩みの所為なのに、まるで月の仕業であるかのように流れるわたしの涙ではないか。
87番	ムラサメ ツユ ヒ マ キ ハ 村雨の 露もまだ干ぬ 真木の葉に	キリタ アキ ユウダ 霧立ちのぼる 秋の夕暮れ	あわただしく通り過ぎたにわか雨が残した露もまだ乾ききらないのに、槇の葉にはもう霧が立ちのぼっていく秋の夕暮れである。(なんととももの寂しいことではないか)
88番	ナニワ エ アシ 難波江の 蘆のかりねの ひとよゆゑ	ミ ツ 身を尽くしてや 恋ひわたるべき	難波の入江に生えている、芦を刈った根のひと節ほどの短いひと夜でしたが、わたしはこれからこの身をつくして、あなたに恋しなければならぬのでしょうか。
89番	タマ オ タ 玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば	シノ ヨフ 忍ぶことの 弱りもぞする	わたしの命よ、絶えることなら早く絶えてほしい。このまま生きながらえていると、耐え忍んでいるわたしの心も弱くなってしまう、秘めている思いが人に知られてしまうことになろうから。
90番	ミ セ ば や な オジマ ア マ ソデ 見せばやな 雄島の海人の 袖だにも	ヌ 濡れにぞ濡れし イロ カワ 色は変はらず	(涙で色が変わってしまった) わたしの袖をあなたにお見せしたいものです。あの雄島の漁夫の袖でさえ、毎日波しぶきに濡れていても、少しも変わらないもののなのに。
91番	ナ 鳴くや霜夜の さむしるに	コロモ 衣かたしき ひとりかも寝む	こおろぎがしきりに鳴いている霜の降るこの寒い夜に、むしろの上に衣の片袖を敷いて、わたしはたったひとり寂しく寝るのだろうか。
92番	ソデ シオヒ ミ オキ イシ わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の	ヒト シ 人こそ知らね かわく間もなし	わたしの袖は、潮が引いたときも水面に見えない沖にあるあの石のように、人は知らないでしょうが、(恋のために流す涙で) 乾くひまさえありません。
93番	ヨ ナカ ツネ ナギサコ 世の中は 常にもがもな 渚漕ぐ	ア マ オフネ ツナデ 海人の小舟の 綱手かなしも	この世の中はいつまでも変わらないでいてほしいものだ。渚にそって漕いでいる、漁師の小船をひき綱で引いている風情はいいものだからなあ…
94番	ヨシノ ヤマ アキカゼ フ み吉野の 山の秋風 さよ更けて	ふるさと 寒く 衣打つなり	吉野の山の秋風に、夜もしだいに更けてきて、都があったこの里では、衣をうつ砧(きぬた)の音が寒々と身にしみてくることだ。
95番	オ ウ ヨ タミ オ フ おほけなく 憂き世の民に おほふかな	わが 立つ 袖に スミゾメ ソデ 墨染の袖	身のほど知らずと言われるかもしれないが、(この悲しみに満ちた) 世の中の人々の上に、墨染の袖を被いかけよう。(比叡山に出家したわたしが平穩を願って)
96番	ハナ ウ アラシ ニワ ユキ 花さそふ 嵐の庭の 雪ならで	ふりゆくものは わが身なりけり	(降っているのは) 嵐が庭に散らしている花吹雪ではなくて、降っているのは、実は歳をとっていくわが身なのだなあ。
97番	コ ヒト マヅホ ウラ ユウ 来ぬ人を 松帆の浦の 夕なぎに	ヤ 焼くや藻塩の 身もこがれつつ	どれほど待っても来ない人を待ち焦がれているのは、松帆の浦の夕凧のころに焼かれる藻塩のように、わが身も恋い焦がれて苦しいものだ。
98番	カゼ ソよぐ ナラ オガワ ユウダレ 風そよぐ 檜の小川の 夕暮は	ミソギ ナツ 御禊ぞ夏の しるしなりける	風がそよそよと檜(なら)の葉を吹きわたるこのならの小川の夕方は、(もうすっかりと秋のような気配だが) 川辺の禊祓(みそぎはらい)を見ると、まだ夏であるのだなあ。
99番	ヒト オ ヒト ウラ 人も惜し 人も恨めし あぢきなく	ヨ オモフ エ モノオモフミ 世を思ふゆゑに 物思ふ身は	人が愛しくも思われ、また恨めしく思われたりするの(は、(歎かわしいことではあるが) この世をつまらなく思う、もの思いをする自分にあるのだなあ。
100番	モモシキ フル キバ 百敷や 古き軒端の しのぶにも	なほ 余りある 昔なりけり	御所の古びた軒端のしのぶ草を見るにつけ、(朝廷の栄えた) 昔が懐かしく思われて、いくら偲んでも偲びきれないことだ。

※所説あり

参照:

<https://hyakunin-issyu.com/explanation>

<https://hyakunin.stardust31.com/gendaiyaku.html>